4月多く出たのが2種で、1種は、変化がみとめられ
ない。アシハツカネネミは、2多だけしからべたいづ
れも月別には100：100とみてよい。

しかし、6か月間を合計したものでは、クマネズミで
は1多だけ♀の方が多く、といえる。ドブネズミは3多と
も2多の方が多いとみとめられ、アシハツカネネミは、
1多だけ♀の方が多いとみとめられる。

いずれの種類も、営巣期半間の季節的変化は認め
られない。夏季の採集で得た個体数は少なく、多の材料と
同時に論ずるのには不適当である。

3月間の統計についてみるとクマネズミは♀が少なく、
ドブネズミ及びアシハツカネネミは♀が多い。これ
は、♀♂の少しずつの差が確実である結果であるが、こ
の少しずつの差はネズミ類の生態によって生じるものと
考える。多の材料でドブネズミ、ハツカネネミは相当数屋
外に密黒していると思われるが、駅除にしては卵中に
♂が行動の圏域によって卵や卵殻にかかなり難い
ものではないか。これに反しクマネズミは圏室を通じて家
内にあるためにむしろ卵中に♂の方が卵や卵殻にか
かり易いのではないかと思う。

神戸市における鼠類の研究

Miyata, L.: Studies on rats of the city of Kobe.

宮田寛德

神戸市に於て捕獲せる鼠類に就て、それらの生態分布
などに関する調査を行い、且つそれら鼠類の外部寄生
虫、特に毛虫につき、又内部寄生虫類に就て検索し
得た成績があるので、併せて各事項の概要について
報告する。

大阪市内における棲息鼠の様相について

Tanaka, H. and Ikuzawa, M.: On the studies of the rats in Osaka City.

田中英雄 生態習性

大阪市内の戸族の様相については昭和25年1月から
6月迄は R. n. norvegicus が優勢を示したがこれは食
物等による一時的移動の関係と思われる。その後 R. r.
alexandrinus が次第優勢を示し本調査によるripp合風
以後は明らかに本種が優勢を示している。

本調査による材料は昭和25年10月16日から昭和26
年2月28日迄の間に大阪市内の各区で捕鼠 Raiderによって
捕えた15,501頭の鼠類である。

全捕鼠類の種類は R. r. alexandrinus, R. r. rattus, R. n.
norvegicus, R. r. hibernicus, R. n. nor., x., R. n. albinus 等で、その百分比は R. r. alex. 76.1%, R. n.
nor. 23.7%, R. n. hiber. 0.2%, R. r. rattus 0.1%で R. r. alex. が高率を占めている。更に種類の
点から見ると、昭和25年1月から6月迄 R. n. nor.の
多くかった西淀川区此花区の臨港地域は台風以後R. n.
nor. が急激に減少し R. r. alex. 西淀川区90.1%此花
区78.7%に対し R. n. nor. は西淀川9.9%, 此花20.
4%に過ぎない。これは台風による R. n. nor. の移動
が考えられる。即ち周辺区の西区、南区では R. n.
nor. は々々34.5%, 41.0%と比較的高率を示した。
R. n. hiber. は昭和25年2月臨港区で始めて捕えた
られたが、西成、南区等でも発見され市内中心部にも繁殖
しつつあることを知るのである。

鼠類の性比については本調査期間の比較的寒冷時期で
は、R. alexan., R. norve. 雌が多く、全体的に見ると
雌59.1%に対し、雄49.9%であった。次に戸族の外部
寄生虫について見ると、R. alex. では P. spinulosus
34.46%, L. bacoti 26.7%, D. caecigena 12.2%, Laelaptinae 9.76%, C. fasciatus 9.25%, R. nor. で
は Laelaptinae 31.97%, P. spi. 27.64%, L. bacoti
26.69%, C. fasc. 6.87%等で、R. alex. では冬期寒
冷期は鼠類が多く、R. nor. では鼠類が最も多くを
示している。仲夏期に見られた X. cheopis は全く見
られなかった。

大阪市立医大

砂蚤の発育史について（予報1）

Tanaka, H. and Ikuzawa, M.: The life

田中英雄 生態習性

49年本邦に初めて見られた ネズミファラモ（Dermatophitus caecigena J. & R.）は50年4月森下博士等に
よって発表されたのであるが、本種の生態、習性、発
育、被害状況等については未だ発表された文献等がない
ので、現在逐次明した調査実験について報告する。